

# 幼児の模倣行動に関する一考察 —保育園児の観察を通して—

神奈川県立氷取沢高 ○岡 葉子

**目的** 社会性の発達においても、重要な意味をもつてゐる生後1年から2年にかけての模倣行動に注目し、模倣行動の核として、“興味、好奇心”を考え、その表現であると思われる行動と模倣行動との関連を考えながら、幼児の模倣行動の基本的メカニズムを明らかにしていくこと。

**方法** A、B 2つの保育園に通う1才児14名について、保育園における日常生活の中で（自由遊び時、食事時）行動観察を行った。観察には、VTRを使用した。記録を、仲間との遊び、食事、兄、姉との遊びの場面に分け、A保育園10場面、B保育園13場面にまとめた。記録分析は、2人の記録者が1人の子供の行動を同時に追って見ながら、30秒毎に停止させ、お互いの観察の一貫を確認しながら自由表記していく方法をとった。

**結果** 模倣行動の出現率については、仲間との遊びの場面において最も高、数字が得られ、1才6ヶ月をすぎた子供に、特にその傾向が強いことがわかった。模倣行動の内容についても、観察場面、子供の年令によって差が見られた。また、観察の対象となる子供たちに、模倣行動の前に、模倣のモデルとなつた相手の行動に注目し、じっと見たり、姿を目で追つたりする行動や、その相手に近づいたり、そばに座りこんだりする行動が、共通に観察された。このことから、“興味、好奇心”が相手に対して示されてから、模倣行動が出現していくことがわかる。その他に、大人などの子供に、自分より年長の子供の模倣をする傾向や、鉦、太鼓など、音の出る遊具を使つての遊びを模倣しやすいう傾向があることがわかった。